

アマリ～ナイとサホド(ソレホド)～ナイ

服 部 匡

0 はじめに

いわゆる否定対極表現として文末の否定形式¹⁾と対応(「否定と呼応」)し、全体として大きくない程度²⁾を表す要素にサホド、アマリ、タイシテやある用法でのソレホドなどがある。『使い方のわかる日本語類義語辞典』(小学館1994)は、これらに共通する意味は「特に取り立てて言うほどのことはないさま」であり、「意味の上でも大きな差はない」とする。たしかにこれらの表現の意味特徴に一種の共通点があることは直感的に明らかであるが、その現れを改めて観察すると、無視できない相違点があることに気付く。例えば、(1)ではアマリとサホドのいずれもが可能なのに対して、(2)ではアマリは不自然なように感じられる。(以下、特に区別の必要のない場合には、「あまり」と「あんまり」を代表してアマリと表す。日付のみを記す用例はすべて朝日新聞による。?は不自然さを示す)。

(1) この犬は {あまり・さほど} 利口ではない。

(2) この犬は {?あまり・さほど} 馬鹿ではない。

逆に、過度に気にすることへの否定的な勧告を行う(3)では、アマリをサホドに換えると不自然になる。また(4)のような文でも、アマリをサホドに置き換えると意図される状況にそぐわなくなる。(4)は、「気持ちが悪くない」ことを控え目に述べる表現である。

(3) あまり気にしない方がいいですよ。

(4) 税関であれこれ尋ねられるのは、あまり気持ちの良いものではない。

本稿はアマリ～ナイとサホド～ナイの意味特徴、使用条件を記述することを目的とする。サホドとの関連においてソレホドにも、特にその否定文での用法について言及する。また、ソナニ、ソウといった表現についても、時折触れるがその本格的な記

述は別稿に譲ることとしたい。

アマリについては服部（1993）で論じたが、サホドとの対比において再度取り上げることとする。

1 アマリ～ナイについて

1.1 アマリの二つの用法

アマリの用法は、典型的には、(5)、(6)のような用法と(7)、(8)のような用法の二種類に分けることが可能である。服部（1993）ではそれぞれ、弱否定型、過度型と呼んだ³⁾。本稿の直接の対象となるのは弱否定型の用法であるが、二用法について簡単に触れておく。

- (5) これはあまり美しくない。
- (6) あまり上手にできなかった。
- (7) あまり面白いので三回も読んだ。
- (8) あまり飲むと体に悪い。

過度型の用法においては、アマリをアマリニヤアマリニモに置き換え可能なことが多いが、弱否定型ではこうした置き換えは困難である。また、過度型の用法の成立する文法的環境は制約されており、およそ次のような環境に限られる。アマリによって限定される節をPで表す。(本田(1981), 新藤(1983), 森田(1977), 小林(1992), 須賀(1992), 服部(1993)などで論じられている)。

1) 主文において、「ひどい」、「～すぎる」のような、それ自体過度の不都合さを意味するような述語を修飾する場合など（アンマリの方が用い易い）。

- (9) それはあんまりひどい。
- (10) これは {?あんまり/あまりに} 美しい。

2) アマリPを条件節として含む文で、Pの過度さが望ましくない事態Qを惹起することを表す場合（(11), (12)）、Pの過度さが不都合な事態などを惹起するため、通常の状態が維持できなくなり、特別な反応をもたらすということを表す場合（(13), (14)）など。

- (11) あまり飲むと体に悪い。
- (12) このテストは、あまりしつこくやっても良くない。

(13) 練習があまり重荷になるようなら、いつでも退部するつもりでいた。

(14) あまり温度が高くなると、自動的に回路が止まります。

3) アマリPを理由・原因の節として含む文で、Pの過度さが望ましくない事態を惹起（(15)）、またはPの過度さのため平常状態を維持できず、特別な反応を生じるに到ったということを表す場合など。

(15) 人間があまり好過ぎるものですから、つい人に騙されてみんな損ってしまふんです。

(16) あまり騒ぐので、飴玉をやった。

(17) あ的那天はあまり好い御天気だったから、久し振りで御兄さんの所へも廻って来ました。

4) 禁止、Pの過度さへの否定的な評価など。これらは弱否定型との境界に位置する例とも考えられる。

(18) あまり飲むなよ。

(19) あまりしゃべらない人が良い。

(20) あまり小さく書かない方が読みやすい。

1.2 アマリ～ナイの使用条件

アマリPナイの基本的な意味機能に関しては、須賀一好氏（1992）が「対象の状態を肯定的に断定するほどの程度に達していない」ことを表すとされることが、本質的に正しいように思われる。

ここで、現実のPの程度はいかに小さくても差し支えなく、実際、(21)、(22)、(23)のように現実には程度が極めて小さいと話者が考えていると推測される場合にも、一種控えめな表現としてアマリ～ナイがしばしば用いられる。こうした用法はサホドにはない。

(21) 日本のことを「国品卑シカラザル国家」とほめてくれる外国人は、残念ながらあまり見当たらない。(89.1.1)

(22) 自動車に乗っていて落雷にあったという話はあまり聞きません。車体が一種の遮蔽効果を持つからでしょう。

(23) 彼の評判は、はっきり言って、あまり良いとは言えない。

一方、「まさかPないだろう」、「Pはずがない」といった形の文においてはPの部

分にアマリが含まれにくい。こうした環境では、Pが通常考えられない事柄であるという含意が存在する。後に述べるように、こうした含みはアマリ～ナイの意味機能と相容れないものである。

(24) まさか {?あまり・それほど・そんなに} 大きくはないだろう。

(25) {?あまり・それほど・そんなに} 大きいとは思ってもみなかった。

(26) {?あまり・それほど・そんなに} 大きいはずがない。

さて、アマリPナイの使用条件を別の角度から観察してみたい。ある種の形容詞のように、それ自体なんらかの尺度を反映した表現に関して典型的に観察されることであるが、その尺度の方向性により、アマリPナイの使用に対する制約が生じる。

まず最初に、大きい—小さい、広い—狭い、厚い—薄い、重い—軽い、強い—弱い、(背が)高い—低い、といった述語の対について考える。便宜上、本稿ではこれらの述語を「狭義の方向性述語」と呼ぶことにする。

こうした対には、次のような非対称性が見られる(前田(1991)にも、非対称性の指摘がある)。例えば、(27)に比べ(28)は不自然であり、仮に使用される場合があるとしても、その対象が小さいという想定があらかじめなされていることが必要である。また、太田(1980)が指摘するように、(29)において「広さ」と「狭さ」を入れ換えることはできない。つまり「大きさ」や「広さ」は尺度を表す中立的な名詞として用いることができるが、「小ささ」や「狭さ」は、そうではなく、小さい(狭い)ということが意味の内に含まれる。言い換えると、これらの対ではいずれも、例えば、「大きさ」が最低の値である零から一方向に展開し、「小ささ」はその値の低さを表す⁴⁾。

(27) 大きさはどのくらいですか？

(28) ?小ささはどのくらいですか？

(29) 僕の下宿の広さは六畳できわめて狭い(太田(1980))

こうした意味で、それぞれの対について、前者の要素が正方向を反映し、無標的であると通常みなされる。ここで、アマリPナイの自然度に次のような相違が見られる⁵⁾。つまり、アマリPナイにおいてPは、正方向として捉えられる述語でなければならぬ⁶⁾。

(30) これはあまり {大きくない・?小さくない}。

(31) 彼はあまり {背が高くない・?背が低くない}。

次に、良い—悪い, おいしい—まずい, 利口だ—愚かだ, 上手だ—下手だ, きれいだ—きたない, 美人だ—不美人だ, などのように, 片方が望ましい評価を受ける対の一群が存在する。ここでは, 通常, 前者すなわち肯定的な評価を受けるもののみがアマリ～ナイと共起する。「望ましい」方向が通常正方向と捉えられるものと考えられる。

(32) これはあまり {良くない・?悪くない}。

(33) この犬はあまり {利口ではない・?馬鹿ではない}。

(34) この料理はあまり {おいしくない・?まずくない}。

以上は, 「良い—悪い」のような尺度表現の対において, 片方が望ましい意味を持つため, 通常固定的に正方向とみなされる例であった。これに対し, 通常は負方向とみなされる尺度表現であっても, 状況や対象の性質に応じて, 臨時にそれが望ましいと捉えられる(ないし, それが期待される)ことから, 正方向として扱われることがありうる。例えば, 小さいほど価値が高いような商品の問題にする場合のように, 文脈的に通常と逆の方向が正方向と捉えられる場合には, (35)も可能であろう。

(35) これはあまり小さくない。

さて, 難しい—やさしい, 寒い—暖かい, 暑い—涼しい, 忙しい—ひまだ, 新しい—古い, (値段が)高い—安い, 苦しい—楽だ, といった対においては, いずれもが, アマリ～ナイと共起可能である。つまり, いずれをも正方向として捉えることが可能だということであろう。

(36) この問題はあまり難しくない

(37) この問題はあまり易しくない

(38) この店はあまり高くない。

(39) この店はあまり安くない。

(40) 今日はあまり {暑くない・涼しくない}

最後に, (41)のように言うことは可能である。

(41) あまり小さくない方が良い。

これと(30)との違いは何であろうか。(41)は, 「[あまりにも小さい]のではない方が良い」といった意味を持ち, ここでのアマリの意味は先に述べた過度型に近づく。

すなわち、(41)は、弱否定型と過度型との境界に位置する例であると考えられる⁸⁾。

以上、アマリ～ナイが、尺度を反映した述語と共起する場合には、尺度の方向性に関する制約を受けることを見た⁹⁾。

一方、(43)のように、アマリ（～ナイ）が動詞句に対し頻度や量などの側面からの限定を行なう場合には、その表す事柄が望ましいか否かといったことは、問題にはならない。アマリが直接には副詞類を限定する場合にも、尺度の方向性にかかわる制約は必ずしも明瞭に観察されない（(42)のような対立は観察されるが、これは、アマリがなくても同じであると考えられる）。

(42) あまり {きちんと・?いいかげんに} やらなかった。

(43) この頃、学生が試験にあまり {通らない・落ちない}。

アマリPナイにおいて、Pが正方向と捉えられる事柄でなければならないということは、言い換えれば、Pの方向に向かって事態を計ることに、話者の自然な関心が向けられている必要があるということである。そしてその対象事態を計ると、積極的にPであると肯定するだけの余地（「余り」）がないということを表す。つまり結果的には程度が大きくないことを表すのであり、(24)―(26)のように、通常考えられないほど高い程度に達することを否定する機能は持たない。

なお、ここでいう正方向の概念は、渡辺実氏（1987）が、副詞「結構」に関して指摘された「優性」概念と重なりあうように思われる。

2 サホド～ナイ

サホドは、本来的にはソ系列指示詞を含むものでありソレホドと共通点があるが、現代語においては、否定の節以外には生じない。純粹の否定対極表現とみなすことができる。ソレホドが肯定の節においても用いうるのとは異なる。

2.1 サホド～ナイの使用条件

サホドは、アマリと異なり、尺度の方向性にかかわる制約を直接に受けることはない。従って、(44)―(47)のいずれも、適切に使用しうる文脈・状況を容易に考えることができる。

(44) 彼の部屋はさほど広くない。

(45) 彼の部屋はさほど狭くない。

(46) この犬はさほど利口ではない。

(47) この犬はさほど馬鹿ではない。

また、アマリの場合と同様、(48)のようにサホドが直接には副詞的要素（「速く」）を限定する場合や動詞句の表す事柄の程度を限定する場合もある。

(48) 私はさほど速く走れない。

(49) 太郎はさほど勉強しない。

(50) この犬はさほど吠えない。

サホドPナイは、事柄Pの程度がある程度xに達しないことを表す。この意味で、本来の指示詞の機能が全く失われているわけではない。ここでxとはどのような程度であろうか。

一言で言えば、xはPという表現から自然に関心が持たれるような、Pに関して何らかの意味で有意な程度であり、いわば、話し手、聴き手にとり、Pに関して心理的になじみがあると感じられるような程度である。

ここで、xが通常考えられない高い程度であることを含意する(51)―(52)のような例はおかしい（ただし、文語的な文体においてサホドがソレホドに近い機能を持つものとして用いられる場合は除く。以下同じ）。

(51) ?まさかさほど大きくはないだろう。

(52) ?さほど大きいとは思ってもみなかった。

(53) 1000平米? {?さほど・そんなに} 広いはずがない。

上の(53)では、相手の発言に生じた「1000平米」という値は、対象の広さに関して自然に考えられる程度として話者に受容されていないため、サホドによってこれを指すことができない。

さて、上で、xはPという表現から自然に関心が持たれるようなある程度であると述べたが、それが具体的にどの程度であるかは、文脈や状況に依存する。

例えば、xは、文脈において予想（期待・懸念）される程度（(54)―(55)）であったり、文脈に現れた情報から導かれる程度(56)と解する場合もある。

(54) 相当上手かと思ったが、さほど上手でなかった。

(55) 相当難しいかと心配していたが、さほど難しくなかった。

(56) 相当上手だと彼は言っていたが、実際はさほど上手でなかった。

また、常識から予想（期待・懸念）される程度（(57), (58)）と解しうる場合もある。

(57) パーティーはさほど楽しくなかった。

(58) 入試はさほど難しくなかった。

さらに、(59)の例のように、他の一般的な事例から心理的に無標的な程度とみなされる程度を指すと考えられる場合もある。

(59) 太郎も次郎も上手だが、三郎はさほど上手でもない。

また、例えば(60), (61)のような例では、 x はむしろ「有意義にPと言いうる程度」を表すとも解しうる¹⁰⁾。

(60) このケーキはさほどおいしくない。

(61) 彼の成績は、さほど良くも悪くもない。

ここで、(60)ではアマリ～ナイとの相違は小さくなる。これと対比して、例えば、高い水準の味を期待された料理店において(62)のように言う場合、 x は「期待した程度（のおいしさ）」を指しうるが、これがかなり高い程度であるなら、アマリ～ナイとずれを生じる。アマリPナイにおいては、Pの程度がどの程度以下かということは、常識にまかされるが、自ずと、例えば「あまりおいしくない」といえば、一般的な平均以下の味であると理解される。

(62) ここの料理、さほどおいしくなかったね。

無論、例えば(63)のような場合、サhodは、文脈や状況次第で「一見して思われる程度の深さ」、「心配した程度の深さ」、「特に有意義な程度の深さ」など様々な解釈が可能である。上にあげた他の例でも、そこで述べた解釈のみが可能なのではなく、そもそもサhodの指す程度を具体的に特定しうるとは限らないが、それが（当該文脈において）Pという表現から自然に着目される程度であり、いわばPの程度として心理的に無標的と感じられる程度であることに変わりはない。

(63) この傷はさほど深くない。

なお、(45)に比べ(44)は、より文脈の支えなしに（「広いと言える程度の広さ」の否定として）用いやすいように思われる。狭義の方向性述語においては、正方向の述語の方が、より文脈の支えなしにサhod～ナイと共起しやすいという程度はある程度言えるかもしれない。

また、サホド～ナイの実例には、ある対象との差異（違う、～と変わる）、基準点からの隔たり（遠い）、基準となる状態からの量や性質の変化（増える、悪化する）などに関する否定の例が少なくない。これらでは、特に文脈がなくとも、「差があると言えるほどの差、有意義な差」などが自然に関心の対象となるからであろう。いくつか例をあげる。

- (64) 都会では名前さえ忘れ去られようとしている町名が、この写真集には次々に現れる。それも、昔とさほど変わらない町なみまでもなって。(89. 6. 11)
- (65) 彼の家からさほど遠くないところに交番があります。
- (66) ただ貧血がさほど悪化しておらず、体内出血の誘発を警戒する必要もあるとして、待医団は直ちには輸血していない。(89. 1. 4)
- (67) 紙に5センチの線を書くのは、大方の人にはさほど狂わずできようが、大きな輸送車を5センチだけ動かすのは簡単にはいかない。(89. 5. 31)

他方、頻度にかかわるサホド～ナイは、特別の文脈のない場合には、やや、安定しない傾向がみられる。例えば、サホドが頻度に言及する(68)は、量に言及する(69)に比べ、文脈なしではやや不自然な感じがする。これは、「(父が)電話してくる(頻度)」といった事柄に関して、特に有意味な程度というものを文脈なしに想定することがやや難しいという事情による。もちろん、「母はしょっちゅう電話してくるが」のような先行文脈があれば、サホドも自然に用いることができる。

- (68) 父は {あまり・?さほど} 電話してこない。
- (69) {あまり・さほど} 飲まなかった。

Horn (1989: 203) の指摘するように、否定文は、少なくともそのプロトタイプのな用法においては、何らかの意味で談話モデルに既に導入された命題の打ち消しに用いられる。少なくとも否定文の典型的な使用においては、Givon (1979) が次のように指摘することが成り立つと思われる。

Specifically, they [= negative sentences] are uttered in contexts where the corresponding affirmatives has been discussed, or else when the speaker assumes that the hearer's bias toward or belief in - and thus familiarity with-the corresponding affirmatives.

否定対極表現を含むサホド～ナイでは、そもそも対応する肯定の事態が文としてな

りたない点で通常の否定文とは異なるものの、やはり、「x程度に～である」ということに対する話し手、聴き手の関心の偏りが存在することが背景としてなければならぬ。アマリPナイにおいてPが心理的な正方向を反映したものでなければならぬということも、言い換えれば、その方向に向かっての値の大きさに、関心が寄せられることを背景として成立すると言える。

否定文における、否定される事柄への話者の関心の偏りないし着目といことは、より一般的な現象として観察される。久野暉氏（1983）が指摘されるように、「今日は車で来なかった」に比べ「私は1958年に生まれなかった」は不自然であるが、このことも、「車で来た（か否か）」に比べ「1958年に生まれた（か否か）」が話者の自然な着目の対象になりにくいということに帰することができる。

ところで、下記に再掲するような例でのアマリをサホドに置き換えることは困難である。ここでは、Pの程度が極めて低いことを控え目に述べていることが感じられる。ある程度xに達するかどうか、言い換えれば程度xとの差の正負が関心の対象となるサホド～ナイによってこれを表すことはできない。

= (21) 日本のことを「国品卑シカラザル国家」とほめてくれる外国人は、残念ながらあまり見当たらない。(89. 1. 1)

= (22) 自動車に乗っていて落雷にあったという話はあまり聞きません。車体が一種の遮蔽効果を持つからでしょう。

= (23) 彼の評判は、はっきり言って、あまり良いとは言えない。

アマリが過度を表すアマリニの意味に近づく次のような例でもアマリをサホドに置き換えにくいのが、アマリと異なり、サホドには対応する過度型の用法がないことによる。

= (3) あまり気にしない方がいいですよ。

= (86) 作戦終了後、あまり長く現地にとどまらないことが最も重要である。

3 サホドとソレホド

サホドとソレホドの使用される環境、用法の相違について検討する。

サホドの現れが、否定文に限定されているのに対し、ソレホドはそうではない。ソレホドの方が用法の範囲が広く、サホドの領域を包括するといえる。

つまり、サホドの用例では、一般にサホドをソレホドに置き換えても文内容に大きな相違は生じない（下記(70)―(73)を参照）が、後述するように、逆にソレホドの用例においてソレホドをサホドに置き換えることは必ずしも可能ではない。

- (70) 「他の外国語に比べてイタリア語の応用範囲がさほど広くないこともあって、
ついついあと回しに……」と外務省。(89. 1. 6)
- (71) 乾いた塩素を捕集する実験装置は、実験を経験していなくても判断がつくし、
計算も固体の溶解度で少々考えこむ程度で、気体の状態方程式などミスに気をつけ、
慌てずに取り組めばさほど苦しむことはなからう。(89. 1. 22)
- (72) お医者さんは、必ずもとにもどりますからふだんと変わらない生活を送るよ
うに、とおっしゃった。幸い、本人もさほど気にしていないようなので救われ
る。(89. 2. 24)
- (73) 普通の広告なら、さほど気にならないが、「あなたのマンション、買います」
「査定無料、即参上」といったものには、思わずムカッとす。余計なお世話
だ。(89. 2. 26)

まず、指示詞（アレ、ソレ、コレ）＋ホドの一般的性質を簡単に観察した後、ソレホドの用法を観察し、サホドとの相違について述べる。

なお、ソレホドには、体言的用法「それほどのN」、「それほどではない」の他、「それほどに」、「それほどまで（に）」といった用法もあり、サホドにも「さほどのN」、「さほどではない」といった体言的用法もある。

3.1 指示詞＋ホド

便宜上、「指示詞＋ホド（例えばソレホド）において、指示詞（ソレ）が何何を指示する」ということを、略して「指示詞＋ホドが何何を指示する」とも言うことにする。

以下では、(74)のように、指示詞＋ホドが具体的な事物を指示する場合は考慮外とする。

- (74) これ [=この石] は、それ [=その石] ほど大きくない。

まず、(コ、ソ、ア)レホドをこれらと一面で共通点を有する表現（コ、ソ、ア）ンナニと比較してみる。(75)、(76)に見られるように、アンナニなどは、眼前の事態を新たな情報として導入することができるが、アレホドなどではこれが困難である。

ただし、眼前の事態でも(77)―(80)のように言える。指示詞+ホドは、談話に既に導入されている事柄や、話し手・聴き手に既に認識されている事柄しか指すことができないらしい。(無論、独言の場合には聴き手という要素は消える)。

- (75) あれ。{あんなに・?あれほど} 人が集まっている。
 (76) それ。{そんなに・?それほど} 積もっている (じゃないか)。
 (77) あれほど集まっていれば十分だ。
 (78) あれほど集まることは滅多にない。
 (79) (話し手の様子を捉えて) それほど元気なら大丈夫だ。
 (80) これほど言っても分かりませんか?

なお、アレホドは話し手聴き手に共通の知識に属することをしか指せない。また、ソレホドは、(79)のように眼前の、聴き手領域の事柄を指す場合を除けば、聴き手が導入した事柄や、話し手が今新たに導入した事柄などしか指示することができない。これらの制約は結局、指示詞の一般的性質による。

3.2 ソレホドの使用条件

3.2.1 肯定文の場合

まず、否定文以外に現れる「それほど」を観察しよう。最初に「それほどP」という単純な形の文について考える。「それほどP」は、Pという事柄の成立する度合が「それほど」の指示するある度合Xに達するということを表す。ここで、(Pの)度合Xは、先行文脈に現れた命題の成立する程度を指し、それは通常と異なる高い度合であるという含みが生じる。例えば、(81)の「それほど」は「かつての反動政治家が中道改革派に変わる」ということが成立する程度を表し、これは、政治の座標軸の動きの激しさに関して通常と異なる高程度 (奥津敬一郎氏(1986:55)の「非常程度」) であるという含みが生じる¹¹⁾。

(81) かつての「反動体制歴史家」が「中道改革派」に。ソ連政治の座標軸はそれほど激しく動いているのだ。(78. 12)

(82) 太郎は車を軽く持ちあげる。それほど力が強いのだ。

以上のような単純な文以外でもソレホドが非常程度を指示することがある (金水他(1989)などを参照)¹²⁾。まず、ソレホドPを前件とする条件文の場合がある。

(83) それほど上手なら心配ありません。

(84) それほどこいやならやめておけ。

(85) それほど傷が深いなら、助からないでしょう。

(86) それほど金があるなら、苦労しません。(実際ハ金ガナイ)

上の(83)―(86)は、「実情が〜である」ことに関する仮定(田野村(1990:90)のいう実情仮定)を含むものである(ただし、(86)からわかるように、必ずしもソレホドPという事態そのものが実際に実情である必要はない)。ソレホドを含む条件節は実情仮定に限られるか否か、今のところ不明であるが、条件節が実情に関する仮定を表すものでなく、かつ、Pの程度の高さを避けるべきであるとする含みが生じる(88)、(89)のような場合は、ソナニ等と異なって、不自然となる。(87)のような禁止の文が不自然なものこれに関連すると思われる¹³⁾。

(87) |そんなに・?それほど| 騒ぐなよ。

(88) 日に二回? |そんなに・?それほど| 水をやっては駄目です。

(89) 日に二回? |そんなに・?それほど| 水をやったら、根が腐ってしまいま
す。

さらに、理由や原因の節(90)、存在のまれさや実現の困難さ表す文(91)、(92)などでもソレホドが現れる。

(90) それほど上手ですから、うまくいかない筈がありません。

(91) それほど上手な人も珍しい。

(92) それほど上手に書くのは難しい。

下記(93)は、「それほど国際的な作家は普通牟礼町を第2の故郷になどしない」という含みを持つ。(94)も「それほど調子が悪いなら普通無理をして出場しない」といった含みを有する。(95)は「それほど豊かである」という命題への疑念を表明する文である。「なぜそれほど〜のか」といった形の例もある。

(93) それほど国際的な作家が牟礼町を第2の故郷ともしていた理由は、何だった
か。(89. 4. 13)

(94) それほど調子が悪いのに、無理をして出場した。

(95) われわれはそれほど豊かだろうか (89. 1. 24)

ソレホドの生じうる文法的環境に関してさらに一般性のある説明を与えることは重要な課題であるが、当面の主題ではないので別の機会に譲る。

3.2.2 否定文の場合

さて、否定文においてもソレホドが非常程度を指示する例が存在する。(96)がその例であるが、ここで、ソレホドをサホドに置き換えることはできない。

(96) たった一日でできた。それほど簡単だとは思ってもいなかった。

以下の例も同様であって、ソレホドをサホドに置き換えると、先行の事態を直接指示することができなくなり、通常と異なる高程度という含みもなくなる。

(97) 太郎は車を軽く持ちあげる。私はそれほど力が強いではないが、自転車ぐらいなら持ちあげられる。

(98) どうせ「世間は張り物」、見せかけだけだ。「内裸でも外錦」と笑い飛ばせばよい。ただしこの種のことわざが少ないのは、それほどあきらめ切れないせいなのか。(89. 4. 11)

(99) 米国議会図書館では蔵書1800万冊のうち、すでに200万冊が利用不能、またフランスの国立国会図書館でも800万冊のうち60万冊が利用不能、との調査結果が出ている。それほどひどくないが、わが国でも国立国会図書館などで壊れかかった本が出始め、[中略]約55万冊はこのまま放置しておく危険という。(89. 10. 21)

また、(24)―(26)のような例でのソレホドも、非常程度の含みを持ち、サホドと置き換え難いことは既に述べた。

一方、(100)、(101)のようなソレホドは、例外的高程度を指示する文脈照応的用法ではなくむしろ、「予想される程度」、「特に匂うと言いうる程度」といった解釈が許されるため、サホドに置き換えが可能である。

(100) 今日はそれほど寒くないね。

(101) 梅の花はそれほど匂わない。

一般的に言って、否定文でのソレホドの用例において、ソレホドをサホドに換えても大きな相違を生じない場合が多い。以下にその例をあげる。

(102) [管理職が] 愛好するのは、やはりゴルフ。ただし、スポーツ無縁の人も結構いて、このあたり、経営者、管理職も、“普通の人”とそれほど隔たりはなさそうだ。(89. 3. 16)

(103) 東京圏では土地取引の届け出対象面積は100平方メートル以上まで引き下げ

られ、土地取引の50%に網をかけている。しかし大阪圏、名古屋圏では、300平方メートル以上のまま。これでは取引の15%前後しかつかめず、それほど効き目がない。(89. 3. 13)

(104) 農免道路は国道と国道を結ぶ、20キロ程度で、それほど長くはない。立派に舗装され、大型車は走行を禁じられているが、普通車以下は走れ、完成後は、地域のマイカーがもの珍しそうに走っていたものである。(89. 4. 15)

(105) 貿易摩擦と円高を避けて、日本企業が相次いで海外に進出した。生産が始まると、半導体やモーターなどの部品が輸出され、黒字減らしの効果は、それほど出てこない。(89. 4. 17)

微妙な例もないではないが、およそ、文脈に現れた事態を非常程度の例として指示する場合を除けば、否定文でのソレホドはサホドに置き換えても大きな意味の相違を生じないと考えられる¹⁴⁾ (なお、注3と同種の現象がある)。

ソレホドPの用法には典型的に非常程度を表す用法 (これは肯定文にも、一種の否定文にも現れる) と、サホドに近づく用法 (これは否定文に限る) とがある。前者の用法でソレホドは先行談話に現れた事柄などを指示するが、これは容易に受け入れ難い高い程度であるという含みが生じる。後者の用法ではソレホドは、むしろ、Pの程度として心理的になじみのあるものとして捉えられ、Pという表現から無標的に想定される値を指す。この点で両者は対照的な存在であると言える。

4 結 語

アマリ～ナイとサホド～ナイとは、その実際の現れにおいては意味が接近する場合も少なくないが、基本的な意味機能には重要な相違がある¹⁵⁾ことを明らかにした。また、ソレホド～ナイの使用しうる場合は、サホド～ナイに比べて広いことを述べた。

肯定文でのアマリ、ソレホドにはそれぞれ「過度」、「非常程度」の含みがあり、そのことと関連して、これらの要素の出現しうる環境に制約がある。一方、否定においてもこうした含みがそのまま保たれる場合もある ((41), (97)など) がこれはむしろ例外的である。一般的には過度や非常程度の含みはなくなり、むしろ、アマリ～ナイ、ソレホド～ナイ全体で程度が大きくないことを表し、その背景には、事態をある方向に向かって計った値の大きさへの関心、ないし、事態の程度がある程度xに達するこ

とへの関心が存在する。後者のタイプの否定の場合に限ってソレホドとサホドはほぼ等価になる。

歴史的な用法変化に関しては別の研究が必要であるが、アマリに関しては「過度」を表す用法における節全体の否定から、慣習的にアマリの意味が弱化して現在のアマリ～ナイが成立したものと推測することが一応可能である¹⁰⁾。また、サホド（ソレホド）についても、本来的には非常程度を指示するサホド（ソレホド）が否定文において具体的な指示対象を失って弱化し、大きくない程度を表すサホド（ソレホド）～ナイを生じ、サホドではこうした用法のみが残ったと推測することも可能である。他の可能性として、（アマリについてもサホド（ソレホド）についても）、現在の二用法のいずれとも異なる第三の用法から二方向に分化したということも、論理的には考えられる。

注

- 1) ここで否定形式とは狭義に「ナイ、ズ、マイ（推量）」のみを指す。同じく否定と呼応すると言われることのある副詞類にあっても、例えば「全然」は、（しばしば誤用例として指摘される「全然いい」のような言い方を別にしても）、「無理だ、駄目だ、違う」といった、狭義の否定形式を含まない述語とも共起しうることは異なる。
- 2) 修飾する述語（述語句）の性質に応じて、数量や頻度（生起頻度、事例の存在度合）、程度等の側面からの限定に分化する。また、「あまり上手に歌えなかった」のように、直接には他の副詞的要素を限定する場合もある。
- 3) 次のように、弱否定型と過度型の解釈の間の二義性を生じる場合がある。つまり、節末が否定形式であっても、過度型の解釈を持つ場合がある。これは、服部（1991）でいう述語否定の解釈であり、アマリがナイの作用域外にある解釈と呼ぶことも（そのような見方の適否はともかく）できる。もっとも、こうした述語否定の解釈は、(107)のように「非常に」のような要素に関しても同様に観察されることであり、また、(108)、(109)から観察されるように、述語の種類によって制約され、「面白くない、抜け目がない」のように一種のまとまりをなした述語として機能するものに限られる（工藤（1983））。

(106) あまり面白くないのでチャンネルをかえた。

弱否定型	サホドオモシロクナイ
過度型、述語否定	アマリニ【オモシロクナイ】

(107) 非常に {面白くない・抜け目がない}。

(108) ?非常に美しくない。

(109) ?あまり美しくないので気分が悪くなる。(アマリニ [美シクナイ] の解釈)

なお、いわゆる程度副詞は、否定の作用域ないし範囲内に入らないとされることがあるが、必ずしもそうは言えない。(110)のような否定も不可能とは言えないように思われる。(110)の「非常に／すぐく寒い」のように節としてのまとまりを持つ場合には特に節全体の否定の解釈を許しやすい(服部(1993)補説1を参照されたい)。

(110) {非常に・すぐく} 寒くはないが、多少ひんやりする。

4) 「大小、広狭」といった熟語における順序も多くの場合方向性を反映するが、「遅速／×速遅」のような例外もある。早田輝洋氏(1978)は、こうした対語における要素の順序に関して、意味的要因の他に音韻論的要因が関与することを指摘しておられる。

5) もっとも、例えば「重いー軽い」に関しては、「この荷物はあまり軽い」も可能であるかもしれないが、これは、通常荷物は軽いほうが良いことから、以下に論じる望ましさを要因によるものと考えられる。

さらには、極めて小さいことを特徴とする犬の種族を紹介した雑誌記事を見ているとき、一匹の犬の写真を指指して「でも、この犬はあまり小さくないね」ということ、あるいは、「極細」を称するペンを指して「実はあまり細くない」ということが、あるいはありうるかもしれない。この場合も、「小ささ」を期待する心理、「細さ」を良しとする心理が背景にあることを考えれば、次の要因に帰着すると思われる。

6) ここで、正方向の述語を含むPに対するアマリPナイの使用条件は、Pが話者によって望ましいこととして期待される事柄であるか、あるいは、Pが話者に予想される事柄であるかといったことには関係しないことに注意しなければならない。つまり、「大きい」ことが望ましいことでも予想されることでもなくとも(逆に「小さい」ことが期待され予想される場合であっても)「あまり大きくない」と言える。

7) ここで、「あまり難しくない」は、(111)のように、「難しい」ことへの期待や予想がなくても言える。一方「あまり易しくない」は、「易しい」ことが望ましいと捉えられる場合に限って適切に用いられるように思われる。このことから、「難しい」は本来的に無標の方向であり、「易しい」はその望ましさによって二次的に正方向と捉えられるものとも考えることも可能である(「難易ー×易難」)。

(111) (受験生) 理科の問題、予想通り、あまり難しくなかったね。

8) [[あまり小さく] ない] のように、「あまり（過度型）小さい」に対する命題否定（節全体の否定）を含むものと考えられる。

9) 服部（1993）でも述べたように、アマリは、「～と思わない」のような一種の従属節を含む環境にも現れうる。

ところで、(112)が、本文で述べた尺度の方向にかかわる制約から不自然であるのに対し、(113)は許容される。

(112) ?あまり小さくない。

(113) あまり小さいと思わない。

ここでアマリには、A：補文中の要素（「小さい」）を限定する解釈とB：主文の要素（「思う」）を限定する解釈の二つが論理的に考えられるが、仮にこの文でAの解釈が成り立つとすれば、これはいわゆる否定辞上昇(Neg-raising)分析（ないしこれと実質的に等価な分析）に対する反証になりうる旨、山梨正明氏より御指摘頂いた。

10) 金水敏氏他（1989）は、これに近いソレホドの用法に関して、「常識的に予想される程度」を表すとされる。しかしながら、(61) (114)を、「常識的に予想される程度に良くも悪くもない」と解するのは矛盾でありおかしいように思う（もっとも、予想という用語はしばしば広義に用いられるので、これが著者の意図する解釈ではない可能性もある）。

(114) 彼の成績はそれほど良くも悪くもない。

むしろ、単に「(彼の成績は) 良い」と断定したならば（少なくとも）x程度に良いものと自然に想定される、そのようなx程度（すなわち有意義にPであると言いうる程度）に良くもなく、同様に「悪い」から想定されるy程度に悪くもない、と解すべきではなかろうか。

なお、川端善明氏（1993）は、「梅の花はそれほど匂わない」のような用法が成立することを、ソ系列指示詞に「反照性用法」が存在することに求めておられ興味深い。

11) なお、(82)に比べ(115)はおかしい。「それほどP」は、先行の事態そのものに対する、ある側面からの程度評価を表す場合に、ほぼ使用が限られ、(115)のように別の事態を導くことはできないと思われる。もっとも、(116)のようには言える。
= (82) 太郎は車を軽く持ち上げる。それほど力が強いのだ。

(115) 太郎は車を軽く持ち上げる。次郎も {?それほど/同じほど} 力が強い。

(116) 次郎もそれほど強いと良いのですが。

12) なお、新聞紙面における用例では、ソレホドが肯定の節に現れる場合のうちでは、(81)のように単純な文の形をしたものが特に多い。2例のみあげる。

(117) 戦いに勝った功績でなく、戦いを停止させた功績を、陛下はたたえ、思い

出しておられる。平和を望むお気持ちをそれほど率直に表現されたのだった。
(89. 1. 8)

- (118) 利休ですが、一言わびれば許されるのにと周囲はいったのですが、かれは敢然として死を選んだ。それほど、かれが貫こうとしていたお茶の道は厳しかった。(89. 2. 3)

因みに、朝日新聞1989年版における副詞ソレホドの副詞的用法（ソレホドニ、ソレホドマデなどを除く）のうち否定の節に現れるものが約84％、肯定の節に現れるものが約16％である（CD-HIASK'89（日外アソシエーツ）を利用した）。

- 13) サホドが禁止と共起しないことは、佐野（1993）が指摘している。
14) なお、文+ホドにも二種類の場合が考えられる。例えば(119)は通常と異なる高程度を表し、(120)のようにこれを否定することも可能である。一方(121)の「思ったほど」は、むしろ否定対極化していると言って良い。
(119) びっくりするほど良くできている。
(120) びっくりするほど良くできてはいないが、まあまあできた方だ。
(121) 思ったほどできていない。

- 15) なお、もう一つの類義語タイシテについて簡単に述べれば、これは、むしろ、いわば文脈的に想定される値と実際の値との比の大きさを否定する点で、アマリやサホドに比べ二次的である。「そんなにたいして」などと言いうることもこのことによると思われる。
(122) 「マスコミは騒いでいるが、きょうもたいして揺れていない。伊東が安全なことをPRしなければ」(90. 7. 13)

- 16) 廣坂（1993）は、通時的考察に基づき、元來過度を意味したアマリが、否定と共起した場合に一種の「靡化」の作用を意図して用いることが習慣化したことから弱否定型の用法が生じた可能性を指摘している。

なお、次の二例は、現代語のアマリ～ナイ（ここでいう弱否定型）に近い用法の古い例であるとされることがあるが、廣坂氏も指摘されるように、疑問の余地があるように思われる。

- (123) かたはらいたくおぼゆれど、さすがにあまり卑下してもあらで、いとよきほどにものなども聞こゆ（源氏物語、蜻蛉、新潮日本古典集成による）
(124) つれづれなる折に、いとあまりむつまじくもあらぬまらうとの来て、世の中の物語、この比ある事の、おかしきも、にくきも、あやしきも、これかれにかかりて、おほやけわたくしおぼつかなからず、き、よき程に語たる、いと心ゆく心ちす。（枕草子、岩波新日本文学大系による）

第一に、(123)は「過度に卑下すること、必要以上に卑下すること」の否定として自然に解しうる。(124)はより微妙ではあるが、「公私の区別が曖昧になること」

に否定的な趣旨からすれば、過度のむつまじさの否定と解することもあながち不可能ではない。

第二に、いずれも統語的に | | ……あまり～ | もあらず | の構造であり、アマリを含む節にある程度の独立性が感じられる。こうした場合には、節全体を「九ごと」否定することが容易である(注3参照)。

過去の用例の各々に関して(1)過度型の述語否定「アマリ [～ズ]」、(2)過度型の命題否定「[アマリ～]ズ」、(3)弱否定型のいずれの解釈(あるいはそれら以外の解釈)が妥当であるかを、現代語の語感に惑わされることなく見極める必要がまずあるのではないかと思う。

なお、須賀一好氏も、「『あまりおいしくない』が、現在のよな意味を表すためには[中略]ひとまず『[あまりおいしく]ない』という関係でなければならなかった」と指摘しておられる。現代語でも(41)のような例では「[あまり小さく]ない」を表しうるものと思われる。

謝 辞

本論文の基になる内容を京都大学言語学懇話会(93. 4. 2, 於京大会館)、中部日本・日本語学研究会(94. 5. 7, 於三重大学人文学部)、関西認知言語学研究会(94. 6. 26, 於大阪大学文学部)において発表し、多くの方々から貴重な御意見を頂いた。心からお礼申し上げる。

参考文献

- 井上 優 (1992)「指示表現を含む副詞成分の一特性——『コ(ソ・ア)ンナニ』を例に——」『都大論究』29
- 奥津敬一郎 (1986)『いわゆる日本語助詞の研究』くろしお出版
- 川端善明 (1993)「指示語」『国文学解釈と教材の研究』
- 金水敏他 (1989)『日本語文法セルフ・マスターズシリーズ4 指示詞』くろしお出版
- 久野 暉 (1983)『新日本文法研究』大修館
- 工藤 浩 (1983)「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』明治書院
- 小林可奈子 (1992)「二つの節を前提とする副詞の意味分析について——『あまり』『よほど』『いったん』を例として——」『都大論究』29
- 佐野由紀子 (1993)「程度副詞の共起制限について」同志社女子大学学芸学部卒業論文
- 新藤一男 (1983)「『あまり』の文法」『山形大学紀要(人文科学)』10—2
- 須賀一好 (1992)「副詞『あまり』の意味する程度評価」『山形大学紀要(人文科学)』

12-3

丹羽哲也 (1992) 「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』44-13

服部 匡 (1991) 「命題否定に関する覚書」『徳島大学教養部紀要 (人文・社会科学)』
26服部 匡 (1993) 「副詞『あまり』について——弱否定および過度を表す用法の分析」
『同志社女子大学学術研究年報』44-IV.

服部 匡 (近刊) 「『大して～ない』について」

早田輝洋 (1978) 「対語の音韻階層——なぜ『こっちあっち』と言わないか——」『文学研究』75 (九州大学文学部)

廣坂直子 (1993) 「『あまり』についての一考察」同志社女子大学学芸学部卒業論文

本田晶治 (1981) 「日本語の否定構文(-)」『静岡大学教養部研究年報』17. 1

前田広幸 (1991) 「数量の少量性を強調する『モ』について～尺度の無標方向性および否定の働き」『女子大文学』42

森田良行 (1969, 1994) 「『ぐらい, ほど, ばかり』の用法」『早稲田大学語学教育研究所紀要』7, (『動詞の意味論的文法研究』(明治書院)所収)

森田良行 (1977=1989) 『基礎日本語辞典』角川書店

渡辺 実 (1987) 「程度副詞の体系」『上智大学国文学科紀要』4

Givon, T. (1979) "On understanding grammar", Academic Press.

Horn, L. (1989) "A natural history of negation", The University of Chicago Press.

太田 朗 (1980) 『否定の意味』大修館

服部 (1991) の正誤表

頁	行	誤	正
111	15	(Q)	(~Q)
111	16	Qそのもの	~Qそのもの
111	20	(2)	(B)
112	下3	命題Q	命題X
112	下3	Q→P	X→P

なお、文脈から明らかであると思うが、p. 111, 14-5の「皆が困らない」は「[[皆が困ら] ない]」を意図する。